

【書評】

アラン＝G・ガニョン著
『マルチナショナル連邦制
——不確実性の時代のナショナル・マイノリティ』
(丹羽卓訳)
彩流社、2015年

Alain-G. Gagnon,
*L'Âge des incertitudes. Essais sur le fédéralisme et la
diversité nationale*, Presses de l'Université Laval, 2011.

石川涼子
ISHIKAWA Ryoko

現代のリベラリズムの基本的な理念を打ち立てた政治哲学者として知られる J. S. ミル (J. S. Mill) は、『代議制民主主義』(1861年)において、自由な政治制度の一般的な必要条件是国家の境界線とナショナルな境界線とが一致することであると述べた¹。すなわち、国家とネイションの一致が必要だというのである。本書においてガニョンが支持するマルチナショナルな連邦制はこのような見解と真っ向から対立するものであり、ひとつの国家の中に複数のネイションが存在する場合であっても自由な政治制度は可能であるという。しかもガニョンによれば、マルチナショナルな連邦制は単一ネイションから成る連邦制や民主政よりも優れている。なぜなら、ネイション間の結びつきを深め、市民は熟議に基づいて能動的に政治に参加するために、単なる手続き主義的で消極的な意味合いでの自由だけではなく、より実質的で積極的な意味合いでの自由が可能になるからである。これが本書におけるガニョンの基本的な主張である。

ガニョンはケベック大学モントリオール校政治学科教授であり、ケベック政治、比較政治、ナショナリズムと連邦制についての政治理論といった分野で多くの著作がある。本書は同訳者により翻訳されたガニョンとイアコヴィーノの共著『マルチナショナリズム』(2012年)の続編にあたると言える。前書がカナダ政府とケベックとの関係に焦点を当てた議論を中心としていたのに対し、本書では議論の枠組が広がり、マルチナショナルな連邦

制の意義が他国との比較を通じたグローバルな視点で描き出される。しばしば比較の対象として挙げられるのは、イギリスのスコットランドやスペインのカタルーニャなど、自治を求めるマイノリティ・ネイションであり、マルチナショナル連邦制がカナダの文脈を超えて、複数のネイションが存在する国々で多様性を尊重し反映する政治を実現するための制度であることが繰り返し述べられる。

本書の構成は次のようになっている。第1章ではカナダの言語政策が、個人的権利のみ重視する立場と共同的な権利も重視する立場の双方の視点から考察される。第2章では、グローバリゼーションがマイノリティ・ネイションにもたらす2つの効果 — 中央政府のエリートたちはグローバリゼーションの名の下に効率化という名目でマイノリティ・ネイションの権利を剥奪し中央集権化を進めるが、その一方でグローバリゼーションの進行が国民国家の主権をこれまでになく弱体化させている — が論じられる。第3章では非公式憲法と間文化主義が持ちうる意義が考察される。第4章は現代政治哲学の文脈に照らして地域自治を主張することの妥当性が検証される。第5章では、自治を志向する複数のネイションが存在する国においては、マルチナショナル連邦制こそが有望な統治枠組みであることが述べられる。第6章ではカナダを事例に連邦の歴史的な根拠である協定に焦点を絞り、マルチナショナルな国家にふさわしい連邦文化の実現が論じられる。

本書の邦題でもある「マルチナショナル連邦制」については、本書においては明確な定義や説明がなされていないが、ガニオンとジェームズ・タリー (James Tully) による共編著 *Multinational Democracies* (2001) の序文には、タリーによるマルチナショナル民主政の暫定的な定義がある²。タリーによれば、マルチナショナル民主政は4つの特徴を持つ。第1に、マルチナショナル民主政は自治権を主張する複数のネイションから成るという点で、単一ネイションから成る民主政とは異なる。第2に、マルチナショナル民主政は独立した国民国家の連合ではない。市民は自らが属するネイション (例えばケベック) の自治に参加すると同時に、より大きなマルチネイション (カナダ政府) の自治にも参加している。第3に、ネイションも、政府レベルのマルチネイションも、立憲的な民主政をとる。すなわち、現在一般的に受け入れられている自由民主主義的な規範に対立するような政治的主張は持たない。第4に、マルチナショナル民主政は、多文化主義的でもある。ネイションは同質的で排他的な集団ではない。政府レベルのマルチネイションだけでなく、

それぞれのネイションにも文化的多様性は存在し、多様なアイデンティティの承認をめぐる折衝はいずれのレベルにおいてもなされる。以上の説明を通じてタリーが強調するのは、マルチナショナルな民主政という構想が自由民主主義の規範ののっつたものであり、この構想を発展させることで、現在一般的に広まっている単一ネイションから成る国家という構想よりもさらに深く自由民主主義の理想を反映する政治が実現できるという点である。

ガニョンもマルチナショナルリズムに自由民主主義の深化の可能性を見出していると言えるだろう。ガニョンはマルチナショナル連邦制の実現がマイノリティ・ネイションにとっては解放となり、そしてエンパワメントにもなるという。ガニョンによれば、現行の連邦政府の施策は単一ネイションモデルに基づいており、マイノリティ・ネイションの側から見ると極めて帝国主義的である。連邦政府は単一のネイションからなるカナダという見方に立ち、ケベックの自治要求に対して封じ込め政策を繰り返すことで統合を強めようとしてきた。だが、政治哲学における積極的自由の伝統を見れば、自己決定、支配されない自由、干渉されない自由が自由概念の核心にあり、ケベックが自治権を求めるのは正当なことである。ガニョンは国際的な文書や事例を挙げてこの権利の妥当性を示す。そのうえで、マイノリティ・ネイションによる自治を承認するマルチナショナル連邦制が、マイノリティ・ネイションに解放をもたらし、エンパワメントとなるという。カナダ連邦の中で内的自治権を獲得することがこれまでの政府による抑圧からの解放となり、市民の積極的な参加を通じた自治を実現することがマイノリティ・ネイションのエンパワメントに繋がる。この考察を通じてガニョンは、マルチナショナル連邦制こそが連邦制が持つ潜在力を最大限に引き出すことができ、ネイション間の対話と熟議を通じて信頼を培うことによりカナダの連邦制のエンパワメントにも結びつくことを示唆する。

この議論の中でガニョンはケベコワのようなマイノリティ・ネイションを所与として考察を進めているため、一見すると彼がケベコワ・ネイションを同質的で不変の存在と捉えているように思われるかもしれない。ケベックはフランス語文化に基づく歴史的伝統に基づくマイノリティ・ネイションであるが、ガニョンの観点ではこのことはケベックが同質的なネイションであることを意味しない。こうした歴史的伝統を持つにもかかわらず、ケベック・ネイションの中に多様な人々がおり、また新しい移民を受け入れることによってさらに多様性は増すだろう。ガニョンはこうした新しくマイノリティ・

ネイションに加わる人々を歓迎することの重要性を説く。さらに、「能動的シティズンシップ」の実現を目指すことで、新しいメンバーと以前からいるメンバーとが間文化主義的な熟議を通じて自治に参加することを奨励する。つまり、マイノリティ・ネイションの内的な多様性を排除するのではなく、熟議を通じて包摂できるかどうかがマイノリティ・ネイションのこれからの存続に関わっていることをガニョンは見据えているのである。

しかし、ネイションはベネディクト・アンダーソンが「想像の共同体」と呼んだように実体がないということもできる³。実際に、ネイションを構成する人々は不断に入れ替わり、外部の人々と入り混じり、その境界も変化しうる。多くの政治家や研究者がマイノリティ・ネイションの分離独立や自治権承認に難色を示すひとつの理由はここにあるだろう。こうした批判的見方を受け止めた上でなお、マルチナショナル連邦制の下でのマイノリティ・ネイションによる自治権を本書は擁護する。そのため本書はマルチナショナル連邦制の妥当性と有効性を説明すると同時に、マイノリティ・ネイションが将来に渡って存続するための戦略—熟議と包摂—も提示するという実践的な二面性を持った書物となっている。

本書でガニョンは比較政治学的な見識と規範的な政治理論研究を結びつけ、マイノリティ・ネイションが自らの尊厳を取り戻す方法を専門家ではない読者にもわかりやすい平易な言葉で示して見せた。本書の意義は、他の地域や国々との比較を通じてケベックの置かれた状況がカナダに限らずグローバルな文脈においても普遍的に持つ意義を示したことにあるのである。

(いしかわ りょうこ 立命館大学准教授)

注

- 1 Mill, John S. (1991) “Considerations on Representative Government” in *On Liberty and Other Essays*, ed. John Gray (Oxford: Oxford University Press), p. 430 (水田洋訳『代議制統治論』1997年、岩波書店、380頁)。
- 2 Tully, James (2001) “Introduction” in Alain-G. Gagnon and James Tully eds., *Multinational Democracies* (Cambridge: Cambridge University Press), pp. 2-3.
- 3 Anderson, Benedict (1983) *Imagined Communities* (London: Verso) (白石隆、白石さや訳『想像の共同体』1997年、NTT出版)。